

『イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちは共にいた。そこでイエスは、「群衆は、わたしのことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。19 弟子たちは答えた。『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『だれか昔の預言者が生き返ったのだ』と言う人もいます。」20 イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「神からのメシアです。」21 イエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じて、22 次のように言われた。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」23 それから、イエスは皆に言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。24 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである。25 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては、何の得があろうか。26 わたしとわたしの言葉を恥じる者は、人の子も、自分と父と聖なる天使たちとの栄光に輝いて来るときに、その者を恥じる。27 確かに言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国を見るまでは決して死なない者がいる。』

【説教】

キリスト教では、それがどういうものなのかを伝えるために、十字架を掲げています。十字架というのは、イエスさまが大きな苦難を負われて、命を失ったことを現しています。そして、それだけではなく、イエスさまが他の人を生かすために様々な困難を経験して行かれた、それらのすべての苦しみも現しています。ですから、キリスト教というのは、受難とか苦しみということに、大変大きな価値を見いだしているものだということがわかると思います。私たちは、大切に思う人であればあるほど、苦しみや悲しみのない人生を送って欲しいと願うと思います。なるべく負担をかけないように、苦難からその人を遠ざけようといいたします。しかし、イエスさまは今日の聖書箇所でも、その逆のことをしています。ご自分に従って来る弟子たちに、「自分というものを捨てなさい。私のために命を用いなさい」とおっしゃいます。自分たちに渡された、「十字架を背負って私に従いなさい」と言うのですね。イエスさまはご自分に最も近い者たちにこそ、苦しみを避けるのではなくて、そこに向かって行くことの大切さを教えられました。このことを良く現していると思われる例を、最近私は聴きました。

その方は母親の介護をしながら、その母親の最後を看取るということをされました。そのお世話をしている時は、大変つらくてまさか自分がこんな大変なことをすることになるとは思わなかったということでありました。ですので、はじめは自分は子どもたちに同じつらさをさせないように、早めに手段を講じようと考えたのだということです。しかし、母親を看取る中で、その息を引き取って行くつらい母の状況を共に経験したことは、大きな心境の変化を生んだとのことでした。父親が亡くなったときは近くにいなかったため、ほとんど亡くなったという実感はありませんでした。それが今回は違って、確かに大変だったし母のつらい姿を見るのは苦しかったのですが、それがとても貴重な他には得がたい時間を過ごされました。この大変さの中で、他の家族がみな一つになって、みんな優しくなっていたのだということです。ですので、自分の時もなるべく家族の近くについて、同じようにしたいと思うようになったとのことでした。

イエスさまが、ご自分に最も近い人々にこそ、十字架の苦しみを体験させたいと願ったのは、この方の思いと同じ意味だったのだと思われます。苦しいことや大変なことを避けよう、逃れようとしている時は、返ってそれらの苦しみに心を捉えられてしまいます。それが苦難の中にもきっと何かしらの意味があるのだと覚悟を決

めて行った時の方が、苦しみが苦しみでなくなっていくということを私たちは経験すると思います。そして、もっと進んで、苦しいことの中にこそ、私たちの人生の大切なことが沢山待っているのだと思えるようになったら、それはもう一番良い状態になっているのだと思われます。不安や恐れというのは、どうしても経験してみないとそのことを解消することは出来ないわけです。ですので、苦しみを避けている内は、嫌だ嫌だと不安や恐れでいっぱいになって心に平安はありません。それが返って困難な状況を沢山経験することは、私たちの人生の財産になるのです。その時は確かにつらくて大変なんですけど、今度同じようなつらいことが起こったとしても、自分たちならそれを何とか乗り越えて行けるという見通しや自信も得ることになると思います。イエスキリストの十字架が、その復活の暖かな光によって包まれているように、私たちの苦難もキリストの復活の光によって守られています。ですので、何の意味もない苦しみというものはないのであって、必ずキリストの暖かな光によって大切な意味を与えてくださるものだと信じられます。

そして、こういうことも言えると思います。私たちは、自分の人生の責任を背負うと、とたんに息が苦しくなって、何をしても楽しくなくなってくるということがあると思います。たった一度きりの人生なのだから、決して失敗は許されないとしてしまうと返って体は硬くなって、身動きがとれなくなってしまいます。これはスポーツの世界でよく見かけることだと思います。練習の時はうまく行くのですけれど、本番になると重圧に押しつぶされて力を発揮できないということがけっこうあると思います。そんな中で、とてもうまく行くと天を見上げて神さまに向かって、「これはあなたの栄光です」と、感謝している人がいます。あの人たちは、失敗しても同じことをいたします。失敗したときだけ、これは自分の責任だと責め続けるということは致しません。たとえ自分が思っていたようにうまく行かなくても、その結果を神さまのみ手の中で起こったこととして、そのことも肯定的に受け取ります。やはり、それも感謝なこととして神さまの手から受け取り、その後引きずらないでうまく切り替えて行けるのです。

キリストの十字架を背負って生きるということは、そういうことだと思います。自分たちの人生を、自分の背中から降ろさない限り、十字架を背負うことは出来ません。イエスキリストは、十字架を背負わせることによって、私たちの重い人生の重荷を、ご自分が引き受けて下さるのです。イエスキリストの言葉に、こういうのがあります。「疲れた者、重荷を負う者は誰でもわたしの所に来なさい。休ませてあげよう。そして、わたしのくびき(十字架)を負い、私に学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしのくびき(十字架)は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」

キリスト教というのは十字架をシンボルにしていますが、それは大変重い重荷を人間たちに背負わせようとするものではなく、反対に人間の命を軽くして自由に飛び回れるようにするためなのです。私たちが自分のために生きることをやめてキリストのために生きるのは、この命の交換をするためです。キリストが私の人生を生きることによって、私たちはキリストの命を生きることになります。神さまが、私たちの命を用いて生きてくださいますので、私たちは本当に自らの責任から解放されて、自由になることが出来るのです。

心が自分の方へ、自分へと向かってしまうと、その責任の重さがどんどんのしかかってきて、とても苦しく圧迫されて行きます。それがキリストと共に他の人々の重荷の方に心を向けますと、その圧迫の重さから解放されます。そして、他の人の重荷と共に、キリストと共に背負う時、私たちはその人の人生と共に生きることになります。私たちはキリストを通して、沢山人々の人生を生きることとなり、それだけ世界が広がっていくという恩恵を得られるのです。

イエスキリストは、私たちに十字架を背負わせることで、死へと向かう命のあり方を止めてくださいます。そして、命へと、永遠の命へと向かう方向に、私たちの心の向きを変えてくださいます。この恵みの業を、キリストの十字架を見る度に、思い起こして行きたいと願います。